

## アフロディシアスのアレクサンドロスにおける「神に似ること」

野村拓矢(北海道大学)

人間は「神に似ること(ὁμοίωσις θεῷ)」を目指すべきであるという議論は、プラトンが『テアイテトス』(176B)などで論じたことで古代哲学の中心的話題の一つとなった。特に中期プラトン主義者は、「神に似ること」を人間的生の目標に位置付け、このテーマについて精力的に議論した。本発表で検討したいのは、中期プラトン主義者と同時代のアリストテレス主義者による「神に似ること」に対する見解である。アリストテレス自身も「神に似ること」について実質的に論じており、例えば『ニコマコス倫理学』X巻(1177b30-1178a4)では、神々に帰される観想的生が人間にとってもまた目指すべき生のあり方、すなわち、幸福であるとして称揚される。本発表では、アリストテレス著作への最大の注釈者であるアフロディシアスのアレクサンドロスが、「神に似ること」についていかなる見解を有していたか、そして他の学派、特にストア派とプラトン主義との論争においていかに彼自身のアリストテレス主義的な立場を打ち立てたのかを、彼がこのテーマについて論じる数少ないテキストから明らかにすることを試みたい。

アレクサンドロスが「神に似ること」について明確に論じる一つのテキストは、『分析論前書』注解』(5.20-6.12)である。この箇所において、アレクサンドロスは前述の『ニコマコス倫理学』X巻の記述をパラフレーズしつつ、人間は自らに割り当てられた(συγκεκλήρωνται)困難な状況(περιστάσεις)、言い換えれば人間的な条件から可能な限り浮上する(ἀνακούψας)ことで、神的な観想的活動を行うことができる、すなわち、「神に似ること」が可能になると述べている。

本発表では最初に、この箇所における他学派からの語彙上の影響、そして特定の語の使用の背景にある他学派の見解に対するアレクサンドロスの争論的、あるいは折衷的姿勢を指摘する。まず、「割り当てられた(συγκεκλήρωνται)」や「困難な状況(περιστάσεις)」といった語は、ストア派によって用いられる語である。特に後者は重要な語であり、単なる「状況」とは区別される「困難な状況」を指す語として用いられる(cf. White 1978)。ストア派の立場では、人間はいかなる状況においても有徳となり、それゆえに幸福となると考えられる。この立場に対して、アレクサンドロスは明らかに「困難な状況」を人間の目標たる観想、すなわち、幸福の妨げとなると考えている。このアレクサンドロスによるストア派に対する当てこすりは、人間の幸福には「困難な状況」といった外的要因が関与するか否かをめぐる伝統的議論の延長線上に位置づけられる。

さらに、「浮上する(ἀνακούψας)」という語はプラトンによって用いられた語である(cf. 『パイドロス』249C)。プラトンの対話篇においてこの語が用いられる文脈は、まさに人間的条件に満ちた現世からの逃避を説く文脈であった。しかしながら、プラトンが想定する「神に似ること」とは、観想に没頭する生であるとも、観想によって魂を善い状態にすることで実践をも行う生であるとも解することができる。本発表では、近年の中期プラトン主義研究(Torri 2019 etc.)を参照した上で、中期プラトン主義者が「神に似ること」における実践的側面を重視する傾向にあったことを確認し、アレクサンドロスが同時代の中期プラトン主義者に反し、プラトンの「神に似ること」における観想的側面を強調し、アリストテレスとプラトンの折衷を部分的に図ろうとしていたことを指摘する。同時に、アレクサンドロスが哲学者の理想的生としての観想的生

を論じる際、プラトンを好意的に引くことも併せて指摘する。

続いて、アレクサンドロスの『魂について』(90.11-91.6)を確認することで、アレクサンドロスが「神に似ること」として、いかなる事態を想定していたかを明らかにする。アレクサンドロスは、アリストテレスの『魂について』において導入された(cf. 417a21-417b2)、人間の知的発達段階にそれぞれ対応する知的能力の区別を提出する。すなわち、(1)ある知を学ぶことを可能にする適性としての可能的な知性、(2)知を所有し、完成状態にある知性、そして、(3)実際に知を働かせ活動している知性である。アレクサンドロスは、(3)活動している知性はその思考対象と一致するため、能動知性と同一視される神を思考する際、人間の知性は一瞬であったとしても不滅の神的知性になると主張している。アレクサンドロスは観想を通じたこの神的知性の獲得を、人間の目指すべき目標であると強調する。

しかしながら、人間がこの目標をいかにして達成するのかについては検討が必要となる。アレクサンドロスは魂とは肉体から離れると消滅してしまうものであると想定していたために(cf. 『魂について』2.10-25)、人間が魂と肉体を文字通り分離させることで神的境地へ「浮上する」と考えていたとは思えない。したがって、アレクサンドロスが説く「神に似ること」、すなわち、人間的不死とは、死後ではなく、生きている間にのみ瞬間的に至ることのできる逆説的な境地であると考えられる。

最後に、アレクサンドロスの上記の見解、すなわち、人間による瞬間的な超時間的永遠性への到達可能性が、どれほどアリストテレス自身の考え方に基づくと言えるのかを検討する。まず、幸福とは時間の長短にかかわらず成立するものであり、人間は現世において瞬間的に超時間的な幸福に至ることが可能であるという考えは、プラトンやヘレニズム哲学には見受けられるものの、アリストテレスにおいては(少なくとも十分には)見出されない(藤澤 2000[1980])。アレクサンドロスがこの考えをアリストテレスに帰した背景には、ストア派やプラトン主義との論争に起因するアリストテレスからの逸脱があったと考えられる。そこで着目するのは、アレクサンドロスがアリストテレスの『形而上学』における不動の第一動者を能動知性と同一視した上で、(アリストテレスが決してそう呼ばなかった)「エイドス(εἶδος)」と形容した点である。Guyomarc'h 2008 も指摘するように、アレクサンドロスはこのことで、アリストテレスをプラトンに接近させている。アレクサンドロスがその過程でアリストテレスから暗に逸脱しながらも、「神に似ること」に関するアリストテレス主義的な見解を打ち立てることによって、アリストテレス哲学に超時間的な幸福への到達可能性を見出したことの意義を示すのが、本発表の目標となる。

## 文献

- Guyomarc'h, G. 'Le visage du divin: la forme pure selon Alexandre d'Aphrodise', *Les Études philosophiques* 86, 2008, 323-341.
- Torri, P. 'The telos of Assimilation to God and the Conflict between *theoria* and *praxis* in Plato and the Middle Platonists', in Bonazzi, M., Forcignanò, F. & Ulacco, A. (eds.) *Thinking, Knowing, Acting: Epistemology and Ethics in Plato and Ancient Platonism*, Leiden, 2019, 228-250.
- White, N. P. 'Two Notes on Stoic Terminology', *American Journal of Philosophy* 99, 1978, 111-119.
- 藤澤令夫『藤澤令夫著作集 第二巻』岩波書店、2000(『イデアと世界』岩波書店、1980)